



ル 4
4988



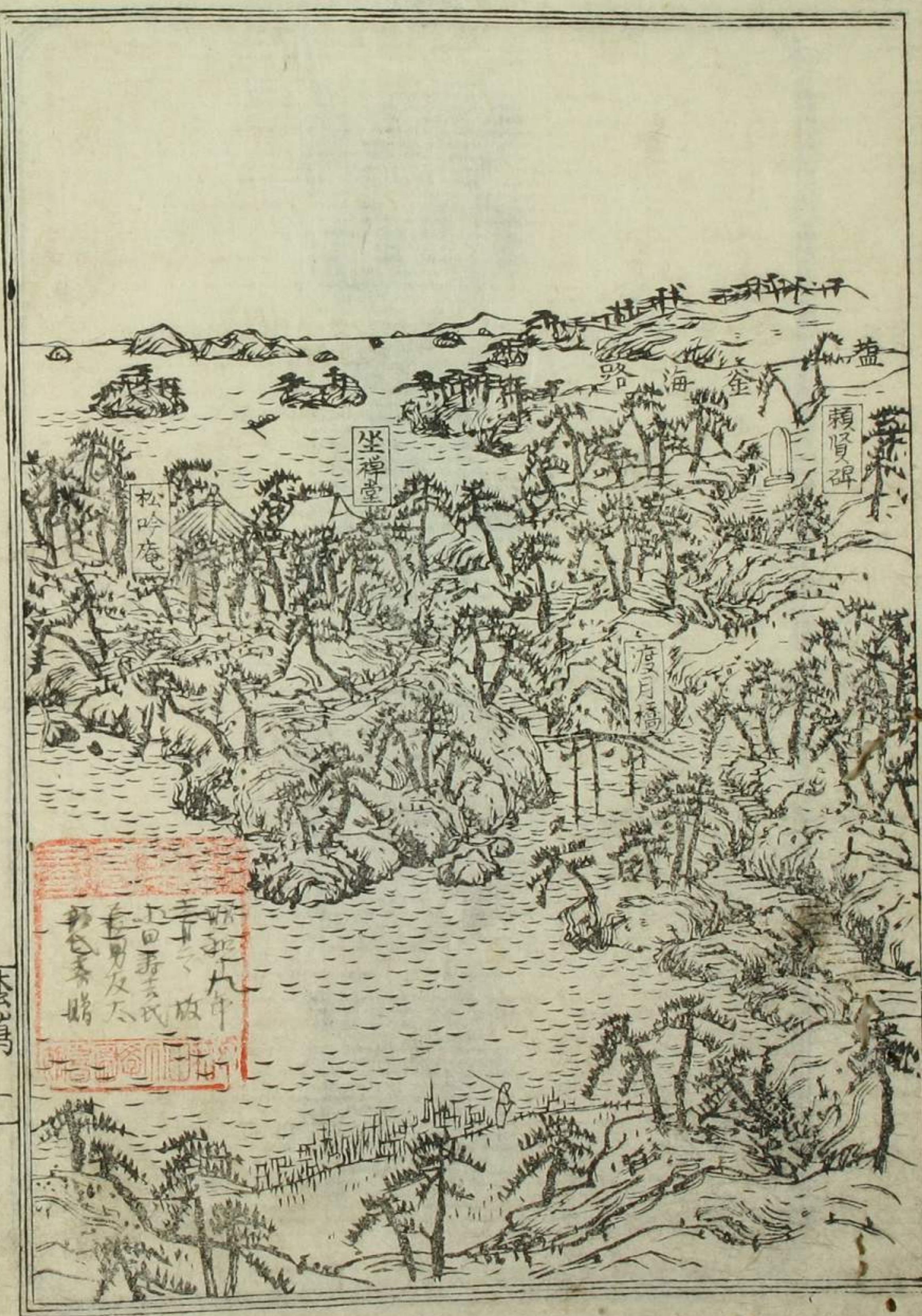
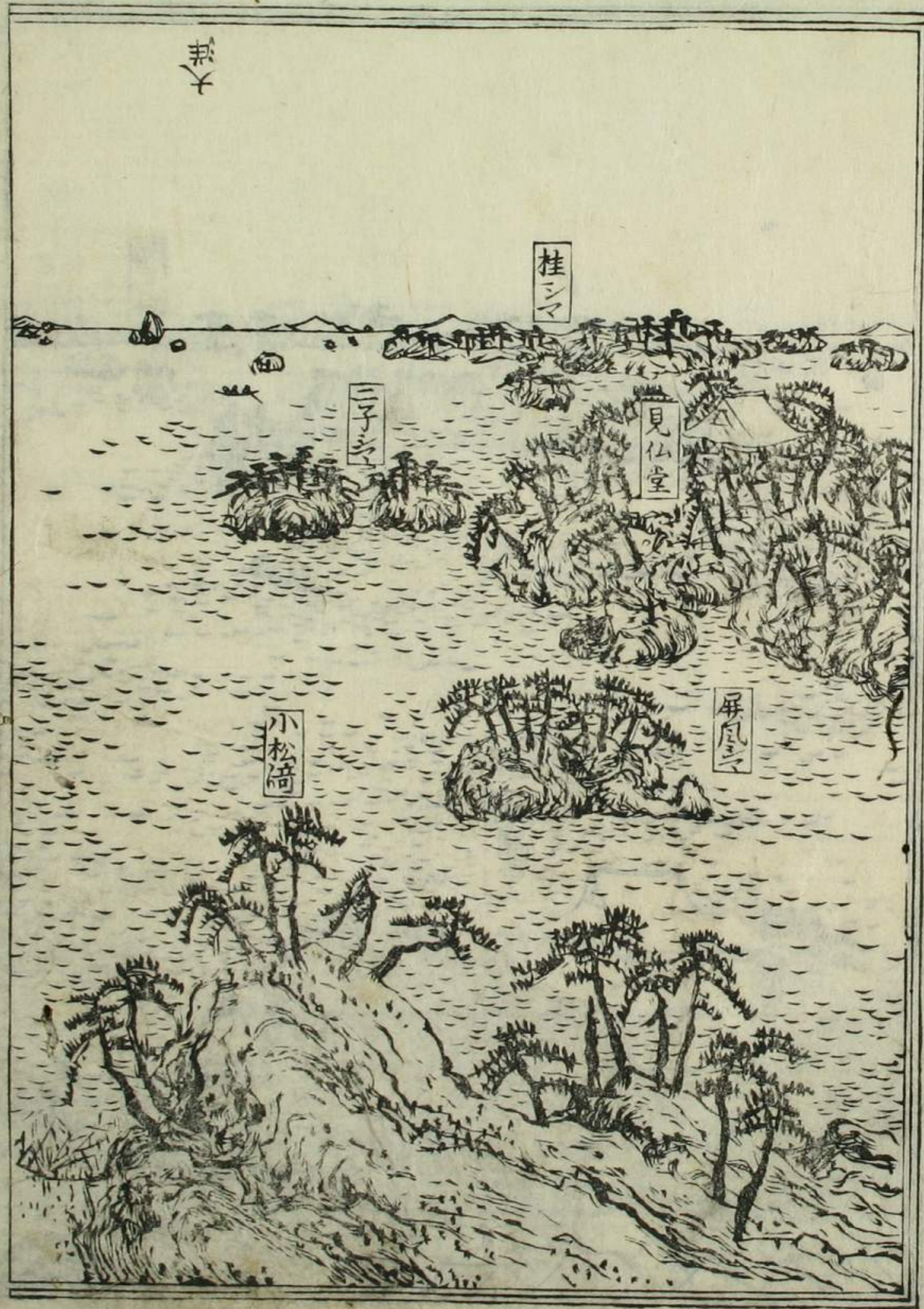
4988

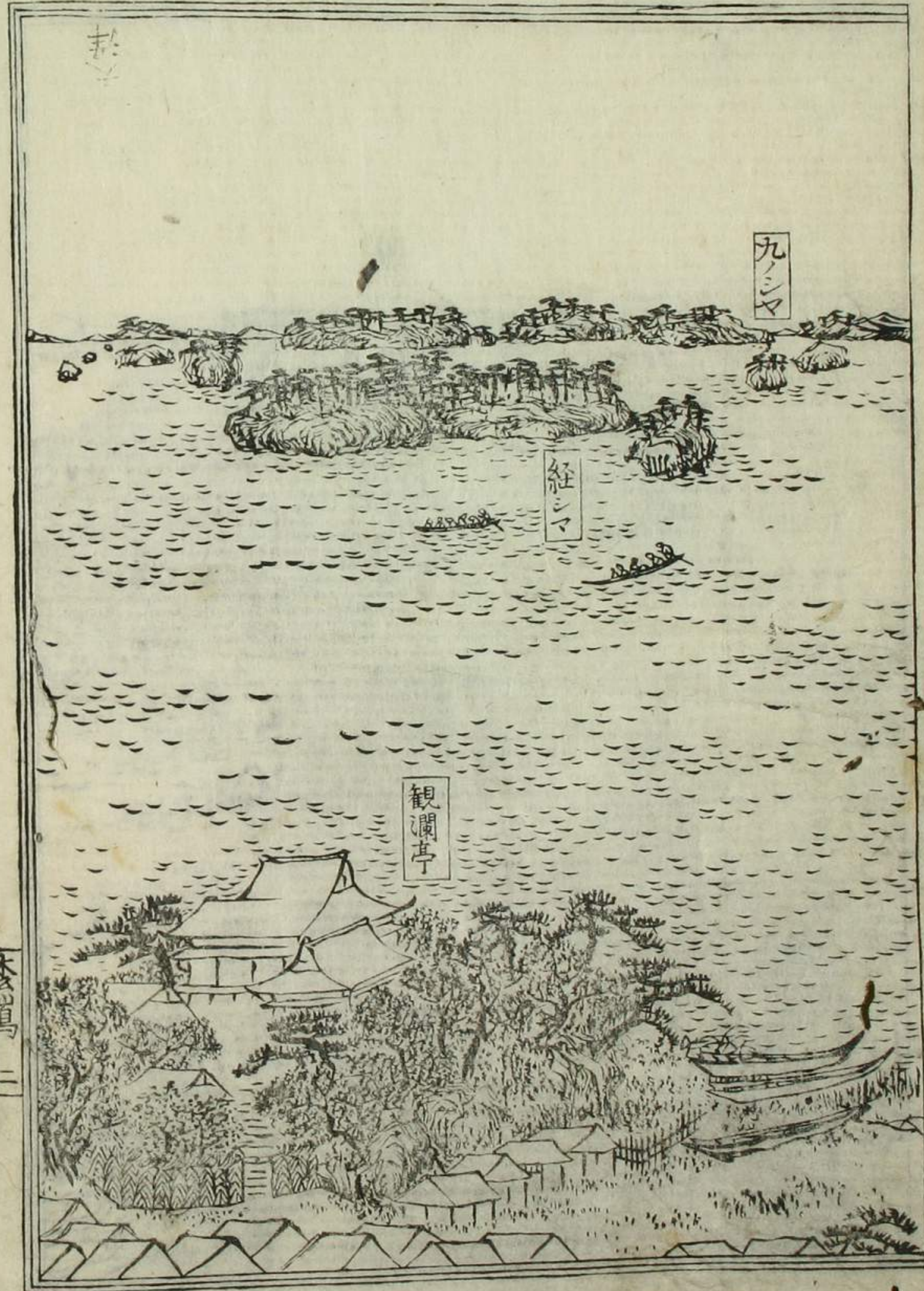
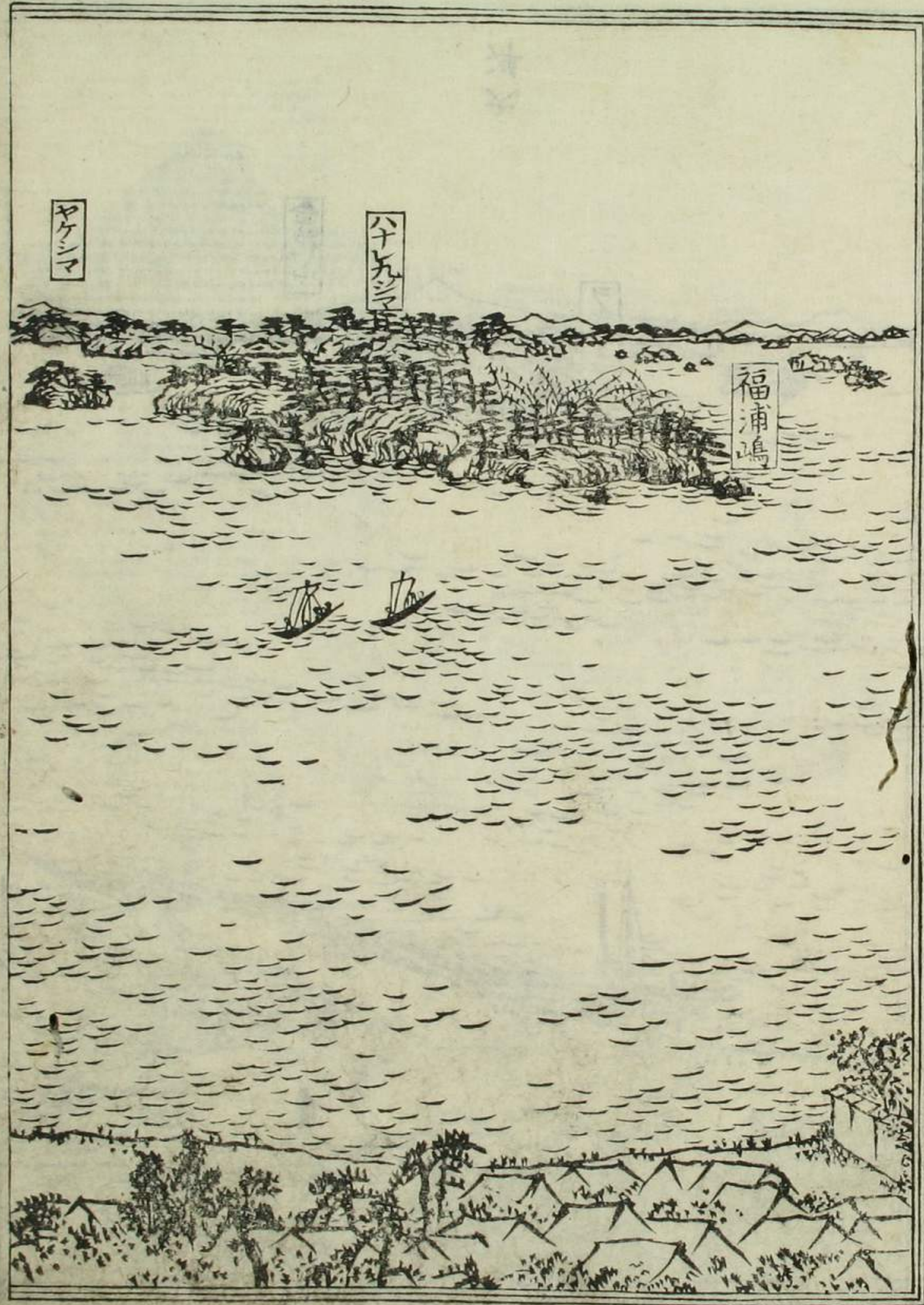


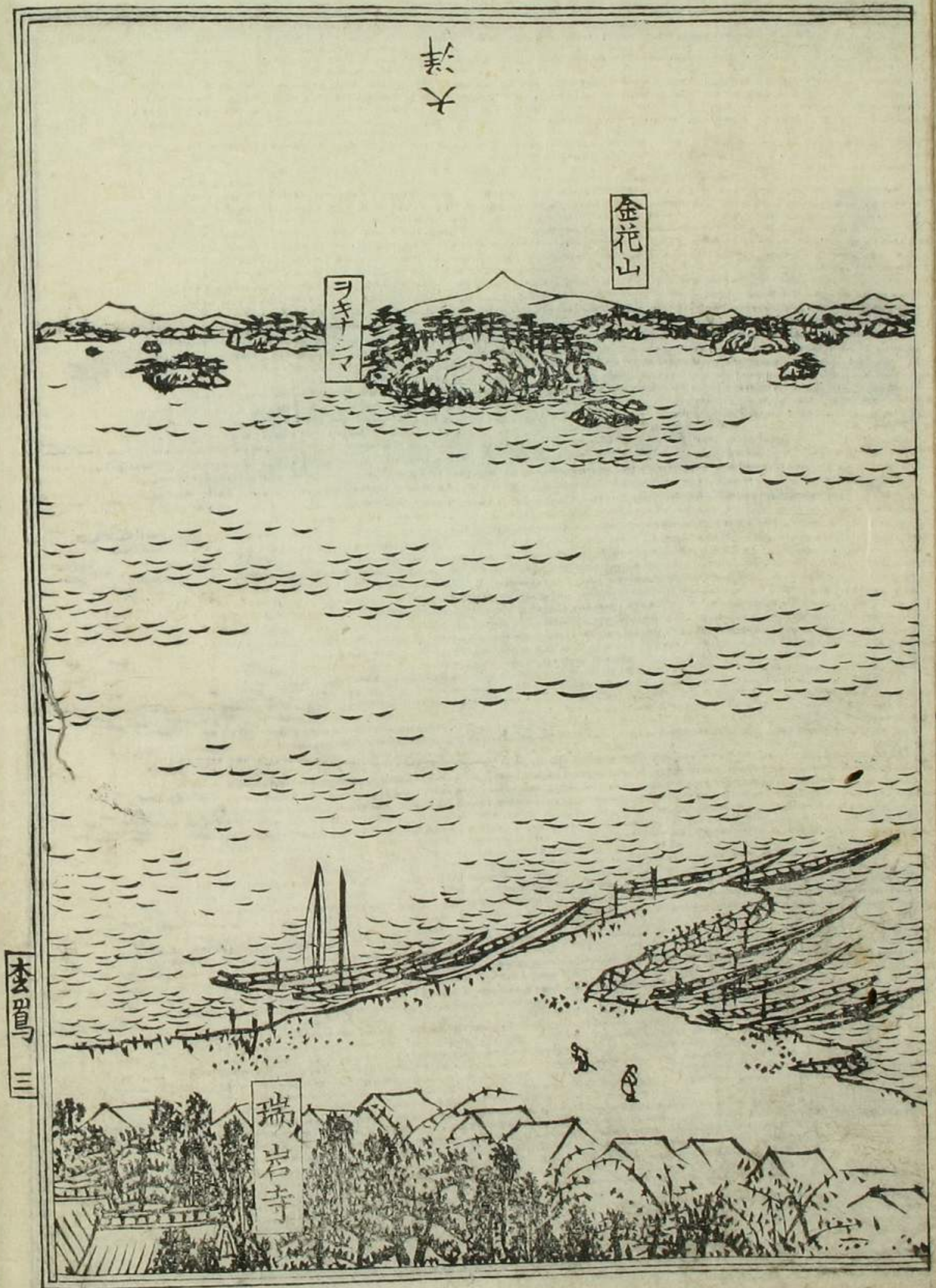
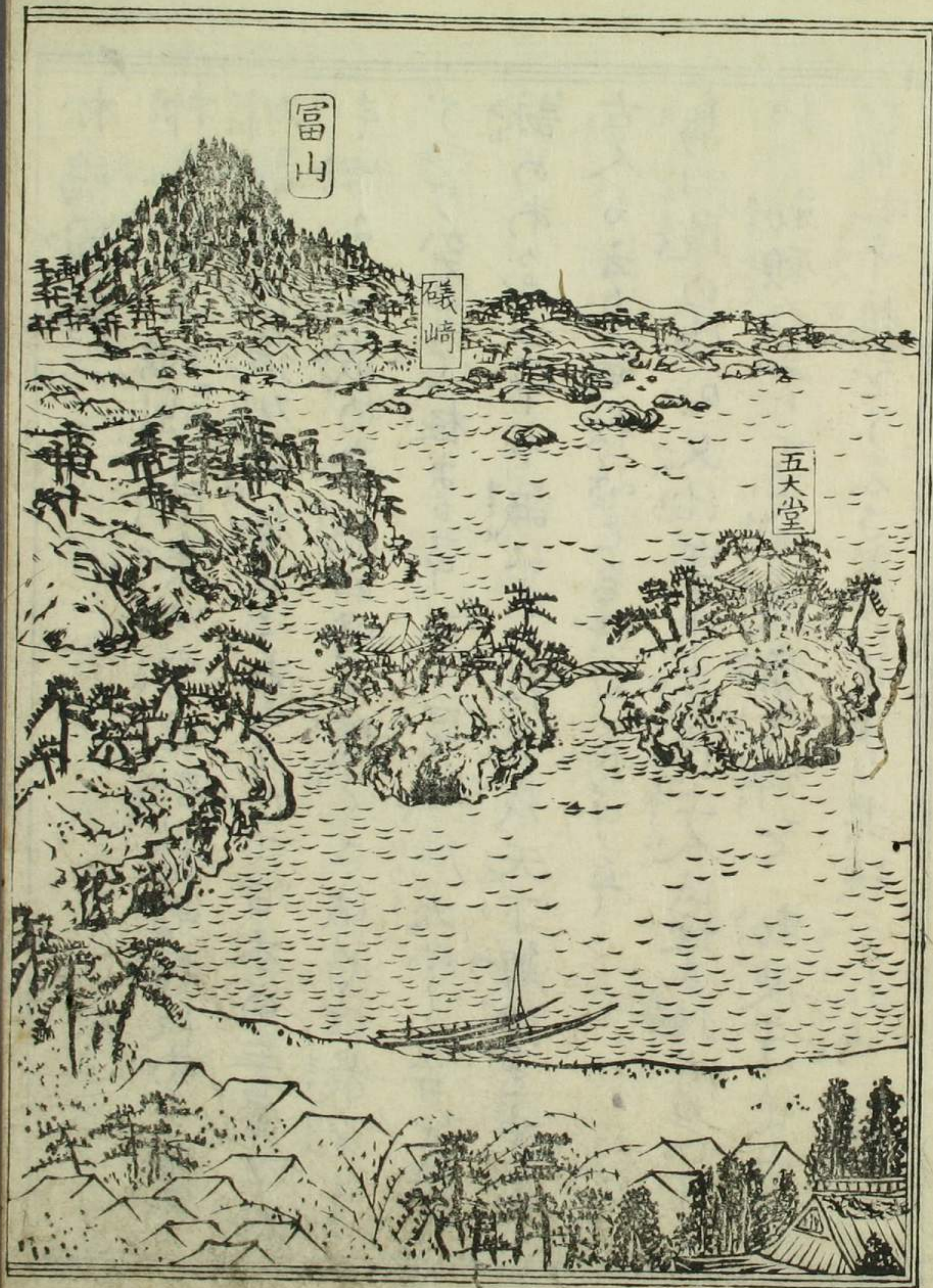
欽定四庫全書



未收本







松嶋圖誌

抑名に松嶋ハ陸奥州宮城郡松嶋村にあり安藝云
州嚴島丹後州天橋立とありて日本の三景と稱
す中よも天成の奇絶四時不隨さほくに晨夕
うつりかえてて極まるるを区域廣大し七日を經て
詠めあうる事々誠に其の松島茂天下無雙とす
古人も云り極松嶋と名づけしなり
鳥羽院の時時文治年中見佛上人は地は位一むひこ
た勅願によりて大内藏康光卿を勅使として此処に
ひめ松千株をうゑさせしめてより其頃千松嶋と稱せ

松嶋圖誌

とや後々略して松嶋とよぶ古歌も松嶋とよむといひ
今ある松ハ千株万株の数を志るべしとていふとも同村
此内阿弥陀山といふ処に勅使松とよぶもの二株有り
一株も圍八尺餘一株ハ圍九尺余ありこれ即古より
たすみ松ありとて此文政の頃より凡六百九十餘年の
星霜を經るといへども弥茂り榮て緑の色殊に深し
按ずるに松嶋の名ハ文治より以前此和歌にも見ゆこれハ
は時よりばまうまうありとて或る松室の名あり
よまて子株の松を栽せしむにや志るるなり
一説或人乃案内記に達磨大師この松嶋よとて

のむ大澤おほさわ 松岑の南にありといふ処に末らせり成聖徳太子待
たまひし待嶋といふは説く説く時を待の字を用
ふべし 鳥羽帝の時より五六百年もあつたり
也されども信ずるにたゞの次○又案内記に見佛上人法嶋
よて日々法華を讀誦志す成鎌倉の二位乃禪尼夢
ぬひて天竺の佛舍利二粒姫子松千本に佛文をそめて
贈りしまふも松岑といふとさきにも禪倉の時よりあ
に松嶋の名ありし古きもの出されは是亦信ずるにたゞ
松嶋といふも總名にして其内少數多の勝地靈跡あり世は
八百八島ありとむいふや大小の嶋々數多をいふべし

今まれをかぞふるに松嶋村は屬して名は嶋三十五
あり 五大堂の島二つ并に甚ちいされ嶋成
合せしむる時々四十にもははまり其餘他村に屬し
て松嶋乃海面小はなり眺望に入る島を數十は
あまきりみな海面はおたろひて碁碁に石をもり
しるがぬくつまも争て奇狀を呈し中にも古より
名高は雄嶋なり名なき小嶋は殆も多るるる
其岑何れも天造の自然にやてあよりえるとはあり
詠むるともぬく乃形成なりし棹をすめ舵をめぐり
に随ふ千態萬狀かぞへ尽し難はるに里人といふ
ともあはれくそ名をたゞるもありはまは其えり

風景の羨なる事春夏秋冬をこころび又晝夜昏且を
るごとく遊人のある所なり中にも見る可きは
雪此朝な里見なき一里人を目残驚うる思ひは
身をうちと叫びんとす諺に人間は何るべし境界に非
ざるいふ○毎年七月十六日乃夜大施饑鬼とく浦上
百八の燈籠を流し遠近群聚して是を見る其光浦を
涵し天燈照るる数多の崎く燈火の流るに随て或ハ
あゝいよ或もかくるるさぬたふべし詞なり

○長老坂 仙臺城下より松嶋に入る道に三丁餘の坂有
はまよりたゞめく松嶋の浦面を見る昔瑞岩寺臨濟

関山法心上人松嶋へ下りては衣をぬきまき
な長老坂と名づくといふ 此圃の番僧の初に僧位何なる
るをいひて緊して長老といふ

按ずるに今眺浪の字を用ふは所浦上哉眺望を
ゆゑに名づくといふも好事の文士附會するなるべし或は
坂長く疲労し身老るに長老となづくとも附會乃
説あり

○西行もご松 長老坂名の傍れ山上にあり俚俗の説
を行も 鳥羽院の北面乃士なり密に宮女も通せしが
そ女度うとなきふ阿志と云ふに西行其詞を解せば
僧とちの諸國を巡りて爰に至る乃の傍松れ下は牛に草

うみ翁ありてそ牛飽ざるをあこがれありと罵りけし
死にまき哉少く公孫こうそん子こ向むかひに伊勢いせの浦うら阿漕あそうがうらに
ひく綱つなも度うとまきばあはれぞすとひふ言を以て答ふ
西行さいぎやう耻はぢくはまよりぬきり依よて西行もどけ松まつをひふ
翁おきなを即すなはち松崎まつざきの明神あきみをまるとぞ

一説ひとしやうに西行松崎まつざきに來る石の入口いりぐちにて童子どうじの牛をひく
まわつて和歌わがをよめりける月にそふ桂男かつらおとこはるひ来て
すたたまむと誰たれ子こあはれん童子どうじききて雨あめをふり
鹿しかもかり旁かたはらもぬりてはむさくさくたが子こあはれん
こふみくく西行さいぎやう大おほに耻はぢく側わきなる松まつを手ておふるべし

して帰りぬ今その様さまへかきく松の大木おほきありそ童子
を松崎まつざきの鎮守ちんしゆ山王さんおう持現もちげん乃化身なりけん也とぞ
松もかきくくそ
るくたが老石
の形に似たり

- 山王社さんおうしゃ 松崎村まつざきむらの社やしろ也 淳和じゆんわ天皇てんかう乃清時せいじ慈覺じかく大
師だいし江劔坂えつさか本もとは山王さんおうを以もつ外ほかに勸請くわんじやうしぬふ初はつを五大堂ごだいどう
天童てんどう菴あんの側わきにありし哉や寛永かんえい十九年じゅうくわんえいじゅうくわんの夷雲えいぐん居い和尚じやうしやう
々乃な交まじに移うつせりと云い毎年まいねん四月中しげつちゆう申まをす乃日申ひまをすの刻とき糸いと或ある有あ
○観音堂くわんおんどう 木像がくがうの観音くわんおん真ま心しん佛ぶつ都つの作つく毎年まいねん四月十八日しげつじゅうはちにち
糸いと或あるあり
- 天麟院てんりんゐん 瑞岩ずいがんさの南横町なんごうぢやうといふ所ところ乃裏うらはむにあり

先太守貞山公の侍姫にて徳川氏越後少將忠輝
朝臣の夫人となりぬひしが忠輝朝臣ありて飛弾列
に謫せしむるひし後夫人を仙臺に返り落飾し西館
といふ處に住むる老後此処に移り六十八歳にて終り
給ふを爰に葬て此寺に立はるとぞ

○圓通院 瑞岩寺の西南生薑浦といふと云ふに有

先太守義山公の侍嫡子越前守光宗公十九歳にて早
世しぬふを爰に葬りて此寺を立はるとぞ

○瑞岩寺 青龍山瑞巖圓福寺と称し山城花園ゆふ
の末流にて臨濟宗也 凡松峯にある所の古き松島寺といふ

仁明帝承和五年七月めづはちを建るといふは

善慈山延福寺と称して天台宗なり其後最明寺入道

時頼 鎌倉の執権 は所より来り法心上人となりて天台を改め

て禪宗とて法心を開祖とて松嶋山圓福寺と称す

そより大覚覚雄智覚覚満明極などいふ唐僧来り

る位持は九十一世義山和尚に至りて鎌倉建長寺の派也

なり九十二世実堂宗中和尚より妙心寺派となすり慶

長十年 一説は九年 貞山公再び造管しぬひ同十四年落成

永く伊達家の宗廟とて寛永十三年 義山公先君

乃遺命にらりて雲居和尚を請待し中興関山とて改

て瑞岩圓福寺と秘承和五年戊午より文政三年

一説に時頼入道旅僧の姿となりて行脚して松嶋に
来り給ひ頃五大堂は舞臺あり能奥行ありし
哉時頼も多し乃人にまねき見抱しむひがそ時
の役者れつちまきま時頼おもつれを声高く笑はき
しを僧徒怒りし時頼を打擲などせしりやうふ
いひこむ其処哉逃去り無相窟にかくれ一宿
志ぬひ鎌倉に降りて故天台僧を追放し法心上人
を関山とて臨滄宗を改め松嶋山圓福寺と名づ
くとゆふ○按ずるに又一説に松嶋寺天台の関基を

淳和天皇の御時天長五年坂本山王を松嶋
に移し慈覺大師哉別當とて三千坊十萬石の法
寄附ありそ時々青竜山圓福寺と云 龜山天皇
の御時文永年中に至りて松嶋山圓福寺といふと
ゆふ未審○法心上人俗名真壁平四郎僧也成
宋の時に入唐し徑山寺の無準とてる僧也從て法
を受け帰国して後法をひきけり委したるゆ
元亨釋書東國高僧傳等に見えたり偈あり遠入
徑山分風月歸開圓福大道場法心透得無一物
元是真壁平四郎又新後撰に足仙上人の和言とて

蓮性法師松崎へまうて法門など談じて取りける
はらゝりる本夜夜の園路に迷ふ身なりとも眠さるん
たむ忍哉尋ねん○雲居和尚も坐攝津次勝尾
山に住せり先太守の招にまうて松嶽に来たり或
人の傳へて拙語よ云居和尚瑞岩奪ふありて夜ごと
は雄嶋の座禪堂へ通ひて觀念を修へ夜ふけり帰
けるがあはれ和尚哉誠んとも最暗き夜をえらびて
道の傍乃松木にのぼりて和尚にぬる哉もちて木の
上より手をせりその首を攫るに和尚立ちまうり
て少しも動くは志づり時屋もそのはらまてありし

うばそれ人あはれまう手哉たなまに和尚と常のぬ
く寺へぬりぬそ後禪屋て和尚と拙語のほらぐに
たづぬるや夜ふけり淋しれ及をばるぐ通ひぬ
夏年月久しれれあやもも有つんなど云
しに更なるしと答へけるあるもの己がなせることこの
んよあるまにそまてとたなくさほぐみ問ひすまに
小和尚答ふゆふや或夜志うぐ乃事ありて久し
く立ちまはり居るが時返はをどその手何にかよ
なるや覚てまはば必若た人なせれらづる夏なる
べしと言しと持

佛殿ぶつだん 豎たて 戴かぶ 拾とく 壹いつ 間ま 横よこ 拾とく 戴かぶ 間ま 案内記に方丈 正面しょうめん に
 先さき 太守たうしゆ 負山公ふせんこう の尊像そんざう 甲曹かうそう の御ご 袋ふくろ 束たもと を法前ほふぜん 子胡銅こどう
 の正ただ 觀音くわんおん 天竺てんぢく より侍つかい 来きた して往古いやくこ 松鴛寺しょうゆんじ 開基くわいき の時
 より本尊ほんそん とり側かた に毘沙門びしゃもん 木像ぼくざう 慈覺じかく 大師だいし 作つく せられた
 に二十人にじゅうにん 乃な 位牌ゐはい を安置あんち せられた 負山公ふせんこう 殉しゆん 死し の事こと 右
 二十にじゅう 七人しちにん の位牌ゐはい みな 義山公ぎさんこう 殉しゆん 死し 此輩こゝら 之の 奥おく の間上まがし
 段中だんちゆう 段だん 孔雀くわんくわ 乃な 間文王まぶんおう の間ま 菊きく の間ま 栴せん 乃な 同墨どうぼく 繪え せられたる
 鷹とら 乃な 等ら 構かま 子合こあひ 天井てんきやう 欄間らんま 乃な 彫ちゆう 木もく 玄げん 関くわん 等ら まじりて
 諸國しよこく の名匠なめいしやう をあつめ 是これ 哉や 造つく り大襖おほすそ 小襖こすそ 等ら の繪え
 も名高なかつた 画工えいこう の筆ふで にして巧妙きやうぼう を極きま め精微せいゐ 哉や 尽つ きた

皆みな 夢ゆめ 長年中ながなちゆう 再興さいかう の造営ぞうえい なり

○火鈴かすず 瑞岩寺ずいがんじ にある什物しつぶつ 也高さ七八寸しちぱん 徑四五寸けいごしゆう
 祕ひ もある鈴すず なり形かたち はり鐘かね の如ごと くにして中ちゆう に舌した あり

手て 又また 握にぎ り交まじ へ紙し をそはきみ
 水引みづひき までむすひをく



先さき 年ねん あやまりて井い の中ちゆう へ
 おと〜〜と〜と〜響ひび 隙まひら あり

昔覺滿禪師の時法を修して唐土徑山寺の火災を
救えりける謝礼として徑山寺より贈れりといふ
毎年正月元日曉丑の時に塔頭此僧一人これを頸に
うけり両手もてふり鳴りて松崎の村中を巡行き火
災戎襖ふの呪法といひり其音清響よき者數十才
の外まづも聞ふといふ

一説俚俗の傳に龍宮城より唐土に傳來しるを
贈りりといふ今按ずるに古々唐山より命令戎あ
まねく人に觸渡き時よ金鐸といふ拍をふりしこれ
を傳ふやいふあり其圖を見るに此火鈴と同じ

さきば彼方に作りし金鐸なるを

○翁面 これ亦瑞岩寺にあり春日の作と云傳ふ願ハ
口の脛より糸にてつなひ合せり松嶋寺天台より五大
堂に舞臺ある時まづこれを用ゐりといふ時ハ五六百
年より以前の拍なり又翁嶋といふ嶋も此面の不思議
にて是る名はくといふ

右の外も仏舍利又鎌倉二位の尼の足仏上人
み贈りぬ法文等什物數多ありしに由り又寺
中厨の竈此邊に火の用心といふを彫る板榜あり
秋葉山三尺坊乃筆迹といふ近江先住の和尚此

時に去きをかけし其字體さほくにくくごりす
 尋常たゞに見ゆるに世の人こそ哉賞羨ま
 ○朝鮮梅 瑞岩すれ庭上は二株の林あり一ハ紅花
 一ハ白花なり其花重瓣にす中は有る葉の外に葩
 の間むとに又少くつ々の葉あり香氣も殊にす
 実々三つ四つ又々五つ六つを同く蒂には交て尋常の
 梅子よりハ小く年よりして十餘も結ぶ事ありさそは
 老樹なほあや年経るに從て実を結ぶ事少くなる
 此に 眞山公朝鮮よりりぬひく時種をばり爰に
 栽させりふと云秘傳花鏡といふ書なほある品字梅鴛

八つ房の梅



鶯梅などいふ種類なるべし品字梅を日本にもありて
そむそ香そ実そ形奇なるかに 後水尾帝花香実
といふ號を修ふそなり

○法身窟 無相窟ともいふ瑞岩寺中にある窟也
竪四間戴尺横四間五寸あり最明寺八道法堂に
宿して法心上人と改宗のりを釣せりといふそのち
七八十年返る嵯峨天龍寺夢窓國師の脚しては
処に至り天台止觀を講ざる哉聴ふといふ窟の上に
法身夢窓窟に五字の額あり

○經堂 瑞岩寺の内あり先住通玄和尚建之といふ

○千佛堂 瑞岩寺の内あり本尊木仏釈迦坐像

長戴尺た太に千体乃仏像長四寸雲居和尚建

立はといふ

○龍月院 ○護國院 ○寶珠庵 ○圓月庵 ○大光庵

○聯芳菴 ○法雲庵 以上瑞岩寺左の

○萬松菴 ○江月庵 ○昔松庵 ○傳曲菴 ○結隆庵

○得住菴 以上瑞岩寺太に 旁に列れ

右十三ヶ菴瑞岩寺乃塔頭なり

○法雲庵の庭上に石二つあり一ハ長五尺幅壹尺五寸
一ハ三角形三尺ぬどづへる昔唐僧覺滿禪師此庵

に住せしはあは時僧徒を集め以二ツの石へ水を汲ふに
させぬ事頻ありれば何れぞと問ふ唐土徑山寺
子火災あり我水の印を呪しきまを救ふありと狼
水を灌地てやま次晩景に至て終りぬ其後一二年を徑
て徑山寺より 禪師に書簡を贈て其功を謝禮
物とて鈴を贈るこまを火鈴と名づけて今瑞岩寺
にあて

○大光菴の玄関に溪自は二字成書する扁額あり瑞
岩寺先住唐僧明極和尚の筆なりは庵を松崎す天台
乃時より何れも古刹寺あり昔を當村の内大光山といふ

山にありしを再興の時より乃此に移せりとぞ

○觀瀾亭 月見崎といふ所あり 太守の侍茶

屋あり 負山公 豊臣太閤より伏見法殿を拜受て

なして此所に移し立はとふ柱を形柵乃四方面

也 案内記は唐木四ツ 雨奇晴好四字の額 先太守獅山公

の御筆觀瀾亭三字は額佐々木文山乃筆なり 外圍

乃垣に細竹を網代に組しり紐を四ツ打十二あり

とりふ是戎貝玉垣と名づく尋常にあり是亦伏見

法殿より移せばありとぞ 貝玉垣を玉垣に代るの妾也 習玉垣と云へり説あり

梅さるに雨奇晴好の四字を宋の蘇軾が西湖の詩

に出る西湖の勝槩唐山にありて天下第一と唱ぬ
松嶋乃風景も日本は何處て第一を稱はるれば西湖
の秀句哉とるる此亭に名づけし最面白

西湖初晴復雨 蕨軾

水光潋灩晴方好 山色空濛雨亦奇

若把西湖比西施 淡粧濃抹也相宜

○陽徳院 瑞岩寺の東北にあり 貞山公の夫人田村

太膳大夫清顯朝臣は法娘をここに葬てけきを立るといふ

○獨鈷水 陽徳院の内にあり昔慈覚大師獨鈷をもて

土伐穿しこれに清水湧出るといふ今に大旱にも涸る

るなしくとらう

按むに天麟院の境内にも獨鈷水といふありて
傳ふる所古きと同じとされども昔々その沙汰なけ

きは近頃の事とおもはる

○天童菴 瑞岩寺の東北にあり本尊十一面観音

木仏立像長き尺五寸日此作陽徳院殿不持といふ

佛といふ

○宮千代墳 天童菴の境内にあり高貳尺余ぬぐり

九尺 宮千代といふ童子を葬る所といふ昔此

ほとりに宮千代といふ童子あり容顔ふるをいふ

才性柔和にして尋常よかまるる友み天より降臨
るの童子なりとく時の人これを天童と秘すは庵
久しく住する所に菴哉も天童と名づけたり其ころ
見仏上人待嶋まで日夜法華を讀誦しぬひし哉
宮千代睦母するり怠ら日哉徑て上人と同く
讀誦せしが其声清く正しくきく人奇異れ
思ひをなせしが上人遷化の後童子も秘なく身まかり
ぬきてまは側に勸請なる鎮守山王の化身に
あまゝんなど人といひけりとぞ

按ずるに封内名蹟志に宮城郡南目村宮城野

の戴拾四間東畑中に空地小塚あり里人これを見
墓と號し昔松嶋寺の児宮千代といふ者此野まで
死を里人憐れこきを埋る塚を築くそ後人乃
好むふに塚の内にて夢あるをきく月夜夢
草禁は宿ありとて嘆く也かくある事
久かりしが松嶋寺の徹翁といふ僧ありそを
ころそれ宮城母の原といひけきばそ後と止
とぞ又ある人乃説に宮千代宮城母よ来りし和歌
の上乃句を得て下れ句哉好む久しくあやどら
らひ終る病となりて身はうぬ遺言にありてその

なれ骸を宮城野に埋むとは二説に據きば宮子代
乃墓ハ宮城野又あるを信とすべし又似たりされども
皆俚俗に傳ふる所にして孰を是と定め可し

○松嶋明神 今ハ松嶋より北の方高城といふ駅の西
にあり紫明神といふ昔々本宮の内蛇が寄る所
又阿里しが此處 負山公の功臣山岡志摩守也云人
の賜たりる在所とて數代の故に故阿りて其
家断絶志けきハ蛇が寄居住ハ人民と相離散してけり
其は言城訳に移りける者多りしは本土の神祠
なきはとて松嶋より乞ひきて今の處に祭はといふ今

蛇が寄に梨木明神といふあり即往古松嶋明神の有
跡なり

一説に々桂嶋にあはぬ神々即古の杵嶋明神なり
といふも非なり

○御舟藏 太守の佛座船等數艘あり松嶋より高
城へ通路のた右に水主町とて數十軒阿りて是をせり
時々船乗の替古あり

○正海壇 正海壇が峯といふ處にあり天台の僧正海
といふ人の墓なりといふ高六尺周六丈ほど阿りされども
今も里人も志る者なり

○護摩壇 山王山といふ所にあり高三尺ほど四方二尺
ふすむとそ側の大なる窟に十二薬師を建立しし
護摩修行ありしと云ふ

○法性院 竹の浦といふ処にあり○一華菴 柿が

浦といふ所にあり○地藏堂 一華菴の前よりあり

○五葉菴 檜岡といふ所の山中にあり客殿に五葉

庵三字乃額あり黄檗木菴の号なり

○雁金山 法崎の西南にあり二つれ高れ峯也雁乃

飛のふに似しるより名づくといふ所下の法辺に出るは

を腕が崎といふ其形状人の腕に似しるより名づくといふ

一説に即馬が嶺崎の轉びるなり又一説に茅野が寄
の訛なりと

○あねとりの山 松岩の西南にあり一説は朱鳥の訛也

昔仙人ありし赤たをを玩しと云ふ

○海無量寺 福聚山と秘を松岩の内南にありて

大沢といふ所の山乃半腹にあり瑞岩寺より十余丁

あり陸を山路に嶮岨なり舟より上りては寺の庭

あり湖上の眺を富山小おとす富山と崎をまを

くながめ此寺より近く見る別に一景の勝地なり

○瑪瑙羅漢 寺中に瑪瑙にて作りし羅漢の小像

数多あり一つ毎にさほくの姿よしてそ細工甚精
妙なり昔唐山より船載しるを瑞岩寺先住勝雲
和尚肥前の長崎にてほろりとゆふ

○羅漢樹 寺中にあり俚俗こきを仏のなる木と云
皮も扁柏の如く葉ハ金松葉に似たり冬を経るを
落葉せびそ実黄赤色よろ俚形に似たり故に
羅漢樹と名づく唐山にてゆふを羅漢柏といふこの
木木曾山中にありいぬまた又くさまもゆふ

○達磨堂 古より上の山の頂にあり俚俗の傳に達
磨大師の所に坐禪しゆふといふ熊耳峯といふ

古に額あり々々寺中に納む達磨大師赤衣木
像日本三達磨と称す片岡和八幡城はまとなぐ
三體ありとさう

○葉山権現 松崎の内苑にあつて禁山といふ雲
にあり真山氏勸請といふも年月も志き似解脱院
といふ額あり

○葉山清水 葉山にあり水清冷よろ大旱にも
涸はるなるとぞ

○湯の原 葉山の辺に昔も温泉ありが天台
改宗乃汲にるり冷水となれりといふ数十年前

瑞岩寺先住の和尚癩瘡を患へに夢中に葉山
松現の告あるにまろくはぬの水を風呂にたてて浴
せしむば速に治ししなりそはまろく人々来りて湯治に
はるまにまろくとぞされども自然の温泉もあらず
志て焚湯ぬり

○窟 松島の内室に窓あり大小百余有べし
まな天台の時僧徒の坐禪などししるぬといふ又里
人の穿る窖蔵とするも多し

○七浦 竹の浦 柿の浦 震が浦 胡桃の浦
生姜浦 片の浦 光徳が浦

○八崎 象鼻崎 小松崎 亀の崎 須崎

法師崎 蛇の崎 津が崎 月見が崎

右の外に天神坊が寄判官坊の寄といふあり
まの往古天台僧徒の住する所といふ

○すかき橋 天童庵のまろく五大堂へゆくぬに橋
二つあり一々長三間一々六間何れも幅六尺おど有
ま那梯子のぬく間をまろくしてまろくに足のかくは
べたぬどありそ下敷板の深きにまろく潮はるる時ハ
漫々も碧水を湛ふるぬにまろくをまろくもの目眩
足震慄しまろくのぬるもあらぬまろく制也

○八幡祠 五大堂鐘樓の側に小祠あり昔々當所
八幡崎と云ふ処に有るを寛永十七年十一月は遷
移されたりといふ類聚國史畿外奉勅宮社の部
に 舒明天皇三年陸奥國宮城郡松嶋八幡奉勅
使 早良連惟保 時疫といふ此時疫癘流行すはにり
て 勅使をたて祈られりなるべしされば千二三百
年より以上の古社なり今に毎年七月廿一日祭式有
○五大堂 江に近た処は小嶋二つあり堂をたてて五
大尊像を安置は大同二年坂上田村磨東夷征伐
しり下りぬは比建立志ぬは後慶長五年 負山公

刈田郡白石城を攻めし時夢の告あるにりて同九年冬
修覆造営等あり前にいへる 鯿口に乾元元年正月土
日草壁入道勸進五郎為武運長久寄附之とあり大同
二年より文政三年庚辰まづ凡一千十五年乾元元年
より凡五百十九年

一説に田村磨の時毘沙門をたてに安置は五大堂の
慈覚大師の時に至りてこれ成おくと後毘沙門を
飛本ぬひぬ今も唐那といふ所の奥急岡村南光
院といふ修験の処にありとぞ

○御嶋 とも雄峯ともけり又小嶋ともり 景行帝

の法時（やまと）よみゆきと日本武尊（とらうい）东夷征伐（せんたう）の時比嶋に舟をよせ
休息（ききう）しむふより侍嶋と唱（とな）といふ

一説に 鳥羽院（とばのゐん）の法時見仏上人は地に住しむて
法（は）力（りき）深（ふか）く神物を役使（えき）せしむ事（こと）那（な）ど夢（ゆめ）し
めて 内裏（うち）より佛像（ぶつざう）器物（ぶつぶつ）ちびに侍衣（しやく）を賜（たま）
りしむり松嶋を侍嶋と唱ふといふ一山の碑文（いしぶみ）
にもは説を用ゐしむるときどもときより以前の古記
歌よも松嶋やをいほとよむる夏多々れハ侍嶋
の名ハ古記事と見えしむ

○渡月橋（とげりけし） 法嶋へこころ橋あり長十間余あり古乃（いにしへ）

松嶋橋を是なるべし民部卿忠教の言に ふてきて
そころもやうび家（や）の夜（よ）咲（さ）ゆる春（はる）いほれ橋

一説に古の杵嶋橋々々五大堂に在る橋是あり
とゆふされどもいづきを證（しやう）とまべた地を今も
何處の橋よを近（ちか）たあそりにあるを又松嶋小
菴（あま）をよむる子け外の古歌よも数多し

○稻荷祠（いなづかのやしろ） 法嶋の橋乃あなといり新法門稻荷と
名づく祈（いの）る者必（かならず）灵験（れんげん）ありといふ

○松吟菴（しょうごんあん） 法嶋薬師堂の側にあり一山の碑文よはる
妙覚庵の舊址よして見仏上人（けんぶつじやう）頼賢（らいけん）和尚などの居る

まじく處なり

○薬師堂

○碑 松吟菴の側にあり高九尺幅貳尺六寸元文元年丙辰七月瑞岩寺先住天嶺和尚の文なり天嶺の師通玄和尚は此に位せしが顔破にありてその三十三回忌の時に修覆再興せしをいふるを書つゝ

○見佛堂

雄嶋にあり里人これを奥の院とよぶ見佛上人法華六万部讀誦の道場なり

○坐禅堂

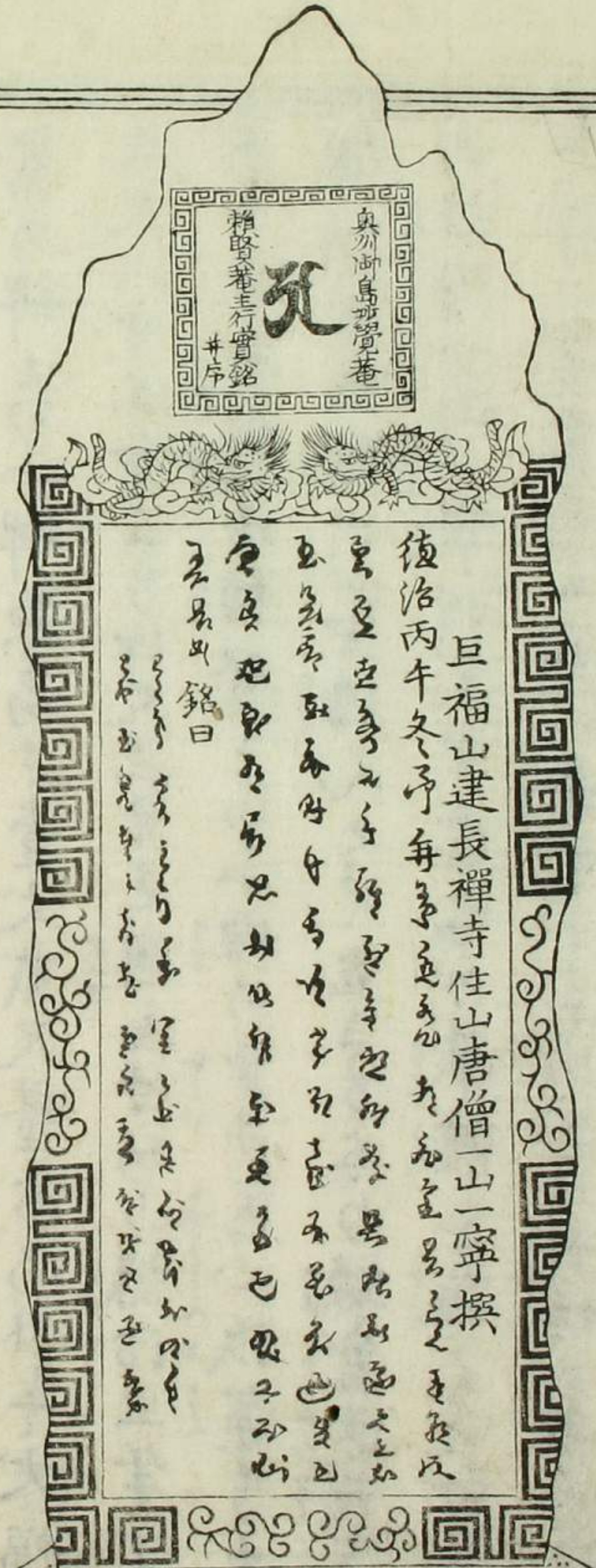
雄嶋より圓満國師を建把不住

軒四字の額あり

○頼賢碑

雄嶋の内西南の方にあり世の人を雄嶋の碑といふ碑熱高き壹丈貳尺基石乃外き丈幅三尺六寸五分より厚尺三寸と厚七寸あり徳治三年丁未の春觀鏡房頼賢といふ僧の弟子匡心孤運等が師頼賢の徳行を傳んとて立つるなり鎌倉建長寺の住僧一山一寧の文并書なり草體を雜るのゆゑ見るに書なり文ハ甚むといふも典雅をみるにたゞ一山を庵僧に鎌倉に位持せり昔この妙覺庵に見佛上人住しぬむしが頼賢も亦は此に居る

真洲山島妙覺堂
 精舎兼行寶鑑
 卅年



巨福山建長禪寺住山唐僧一山一寧撰
 復治丙午冬予每多病疾乃命其子一休
 一休等重修此塔并建石室於塔之西
 東各一間其室中設佛龕於龕之西
 龕前設石案於案之西設石几於几之
 西設石榻於榻之西設石香几於香几
 之西設石火盆於火盆之西設石水盆
 於水盆之西設石盥洗盆於盥洗盆之
 西設石淨瓶於淨瓶之西設石淨瓶
 於淨瓶之西設石淨瓶於淨瓶之西
 一休等謹記

人々帰依深く見佛の再世なりといひくすなど書
 つつ祐より徳治丁未より文政庚辰まで凡五百七十四年
 になほ

○骨塔 頼賢の碑の側にあり五輪石塔高き丈一尺
 三寸圓満凸凹をめぐり建之洞水和尚再建といふそ
 下に深た塘あり人々死者の毛髮齒骨などをかきむ
 ○供養佛 雄嶋の内前後た木の巖の面に率堵婆
 又々仏號法謚等を彫り立つるなり數をたゞまで四方の
 游客をなほそをえる事を厭て徒に口は罵ふのそありび
 等いのせり、誹哉世に傳ふ予れもつづくけ地幽邃閑寂

に〜海山の靈氣を鍾め〜る所にありしよ。来るものも
らび悽愴として感我発〜或も古を志のび今をい
〜又も父母祖先を慕ひ亡妻殤子哉か〜む貴賤
賢愚となく情あるものもその志より其感情の
動くに従ひ昔を追ひ本を報るんあは〜りは等
の営をなゆる愚民に何り〜あや〜とするに〜
に佛教に浸淫して無益の所為をなす〜と
天下溜〜〜〜を志ありた〜は地より何りては
る〜〜〜

○學生嶋 ニツおち〜び〜似〜る〜り名づ〜一ツハ

あは嶋といひ一ツもたま出るといふ

○屏風嶋 屏風を〜てたるぬ〜なる〜り名づ〜

○福浦嶋 此嶋に竹多〜その竹よのつねよ〜

らざれども挿花筒に作りてあり〜りなり〜といふ

好事の人或も茶杓を作り又も尺八如意等哉

製〜又一種乃竹あり尋常にか〜り〜中の空を

く木のぬ〜刀眼釘と〜り〜利用と〜又其枝を

も〜箸をつ〜るはぬの名おなり松の名にお嶋〜

乃中に〜しげれた竹の緑に栄ゆる〜こと〜にめ〜

たれ〜め〜にぞ福浦嶋とも名づけ〜なる〜

○毒龍庵 福浦嶋にあり洞水和尚開基本尊不動木佛立像智證大師作弁芟所持の仏と云傳ふ又弁芟の笈といふ抱あり高三尺ほど横き尺八寸程上下二段に上段に小地辨天并十六童子の木像何のまの長三寸ほどあり表を四面ともに減金乃銅をはりて仏像又と雲氣等を彫付たりせよほいりにも近代の抱よはつと見えたり

○毒竜菴記碑 毒龍菴の側にあり享保十九年甲寅瑞岩寺天嶺和尚志を建碑文の大意は毒龍庵と洞あり和尚修行乃地なるが近きは荒廢

まを修造落成をいりて 太守吉村公に請て来臨あり席上に画師周良をめぐり洞ありの像を画しめ又和哥一首をよみ風景を賞しめ又は日に調伏壇の竹藪の中より曳出せしなといふるを書つて祀りて文艱法にこそ佛嶋薬師堂の碑よりもよみ難し

○坐禪石 毒竜庵のそばにあり洞あり和尚坐禪しめといふ坐禪石の三字を彫付たり

○硯石 福浦嶋にあり長さ尺七寸横き尺七寸洞水和尚習石といひ傳ふと志るものまれあり

○調伏壇 福浦嶋にあり時頼入道松嶋寺改宗の時天台の僧徒とて聚りて時頼を調伏といふ今に熊野神をこゝに祭す

○徳浦嶋 福浦嶋の東にあり

○經の嶋 福浦嶋の南にあり經塚といふあり

寺尺又寸周八尺松嶋寺改宗乃時天台の經文を以て變に焼す、塚を築く嶋に名も是にふるといふ

一説に足仏上人法華六万部をこゝに埋めるといふと非なり

○五重塔 經が嶋にあり高き丈戴尺五寸享保年中萬人戒供養とて天嶺和尚建之といふ

○翁嶋 昔松嶋寺天台宗の時五大堂の前に舞臺あり能成興行せしに翁の面体上をこえては嶋より飛来るかに翁嶋と名づくといふ五大堂より此嶋まで体上凡七八丁ほどへごちたり其面を瑞岩寺に何とていふ

一説案内記に昔天台乃時能與也翁の面春日の作なりが故あり土に埋もて夜中に光をばちちとて嶋に飛来るよりて名づく

〇旭嶋 あさひ 昔々此嶋に弁天べんてん祠ありしといふに其跡あり

右雄嶋より旭嶋までを松嶋の八嶋といふ七浦八崎八崎といふる古よりいひ傳へり右の外はも名ある者たのぬ

〇毘沙門嶋 昔田村磨毘沙門の像を刻くその五大堂の嶋に祭りぬひし其後慈覚大師五大明王を作りし其側に安置しぬひし其はあは時毘沙門光をたぬらしし此嶋に飛びさりぬひぬよりて嶋

の名といふ大黒嶋えびす者などり此嶋の名もは毘沙門者乃類にありし名づけしこと又えり

〇十貫嶋 昔金賣橘次此嶋に渾し一晝夜の者に銭子貫文の利をほするより名づくといふ

〇大黒嶋 〇夷嶋 〇小町嶋 〇いせ嶋 〇布袋嶋 〇内裏嶋 〇すゞめ嶋 〇あぶみ嶋 〇鞍掛嶋

〇鎧嶋 〇あぶと嶋 〇牡丹もち嶋 〇小福浦嶋 〇九の嶋 〇千部嶋 〇鳥羽嶋 〇鴻の巣嶋 〇堂が嶋

〇阿嶋 〇その己嶋 〇焼嶋 〇雁あねし海 〇塔が嶋 〇繪嶋 〇般若嶋 〇雁あねし海 〇塔が嶋

〇行人嶋 〇羅漢嶋 〇地蔵嶋 〇大鼓嶋
 〇鐘ヶ崎 〇折鳥嶋 〇立巻嶋 〇鍋嶋
 〇橋ヶ崎 〇茶臼嶋 〇舟嶋 〇引通嶋
 〇屋形嶋 〇せいがん志海 〇唐櫃嶋 〇かご嶋
 〇都嶋 〇筆捨嶋 〇硯嶋 〇化粧嶋
 〇みつの小嶋 〇離嶋 〇裸嶋 〇引嶋 〇在城
 〇内裏嶋 〇后嶋 〇蛇嶋 〇引嶋 〇在城
 〇桂嶋 〇駒嶋 〇手代嶋 〇大言嶋
 〇小言嶋 〇沖續嶋 〇汀續嶋 〇佐久嶋 〇鐘志嶋
 〇舞子嶋 〇二王嶋 〇月星嶋 〇松ヶ崎

〇卯嶋 〇寒風澤 〇朴嶋 〇百合嶋
 〇白當嶋 〇毛嶋 〇免嶋 〇大放火嶋
 〇小放火嶋 〇小放島 〇帆たろ嶋 〇蛭子嶋 〇達
 〇摩嶋 〇材木嶋 〇高嶋 〇雀嶋 〇榎嶋
 〇權現嶋 〇なべ嶋 〇二嶋 〇東風嶋 〇西風嶋
 〇間風嶋 〇小黒嶋 〇大黒嶋 〇犬嶋 〇亀
 〇嶋 〇つみ島 〇鏡嶋 〇柳嶋 〇屋敷嶋

〇卯嶋 の上の村 〇寒風澤 は二嶋を殊に大なる嶋より
 〇宮戸 この大なる宮なり 〇白當嶋 聖金宮の神を
 〇毛嶋 の上吉田村 〇免嶋 〇大放火嶋 の内のり
 〇小放島 の上子か寄村 〇帆たろ嶋 〇蛭子嶋 〇達 えびまき
 〇材木嶋 のちと 〇高嶋 〇雀嶋 〇榎嶋 えのき
 〇なべ嶋 〇二嶋 〇東風嶋 〇西風嶋 〇犬嶋 〇亀嶋
 〇鏡嶋 の内のり 〇柳嶋 〇屋敷嶋

〇都嶋 の内のり 〇筆捨嶋 の内のり 〇硯嶋 の内のり 〇化粧嶋 の内のり
 〇みつの小嶋 の内のり 〇離嶋 の内のり 〇裸嶋 の内のり 〇引嶋 の内のり 〇在城 の内のり
 〇内裏嶋 の内のり 〇后嶋 の内のり 〇蛇嶋 の内のり 〇引嶋 の内のり 〇在城 の内のり
 〇桂嶋 の内のり 〇駒嶋 の内のり 〇手代嶋 の内のり 〇大言嶋 の内のり
 〇小言嶋 の内のり 〇沖續嶋 の内のり 〇汀續嶋 の内のり 〇佐久嶋 の内のり 〇鐘志嶋 の内のり
 〇舞子嶋 の内のり 〇二王嶋 の内のり 〇月星嶋 の内のり 〇松ヶ崎 の内のり

○のけ田寫○はぬき九の峯ハ上村名 詳あり金剛嶋○薩陀寫

右の峯々大抵松嶋より塩釜まづ舟路二里の間左に又村名なき村とてたづぬる暇もあるべし又村名なき村とてたづぬる暇もあるべし又村名なき村とてたづぬる暇もあるべし又村名なき村とてたづぬる暇もあるべし

○松嶋八景

- 松嶋秋月 雄嶋夕照 梅浦早春 霞浦飯雁
- 瑞巖曉鐘 竹浦夜雨 塩竈暮煙 江縣殘花

○古歌

至陸奥見松嶋又海中右奇嶋往昔日本武

尊至此嶋國首國民崇之言御嶋 上宮太子

松嶋哉御寫者不見止日標方之月之都之外于尋者

和哥本紀下 上宮太子ハ即聖徳太子の流るりとき 家隆朝臣

秋の夜乃月やをりまのあはれ松嶋の木の若らるる雲の如く

皇太后官太夫俊成

立更り又も来り見人松嶋やをり海の音を波にあはれ那

昔より陸奥の奇枕多し松嶋の天

下才一の名勝なきを代々の集に載る古人乃
歌數多たがねにたゞよもらひ志といふ書に又こり觀迹聞老
詩に至りてこそ國風にあはざるゆゑにや古人
の賦詠多うこそそ勝槩は敵にべれ佳作も更
になく唐土にこそ元の代乃詩人一絶句有り

薩天錫

風光招我海山阿 拍手吟魂奈句何
御嶋烟波松嶋月 到茲捲舌富樓那

相摸列
田原坊

松嶋やささくまつははや木の葉もや

或云芭蕉翁は地に来りて風景を賞せしが詞
の及むざるを志りて終に一句を以て
去りぬぬとるる家に歸りて後を得るる句と

草よさを誰まのいぬそこのさつる

▲産物 ○福浦嶋の竹にえさつり ○岩長生即巻拍

○石斛即瓦常 ○雨漏草即徳列骨碑

○寒ざら〜廉角菜 ○水飴 ○茶筌 ○紅蓮せん

るん 粳米を製〜扁く圓く〜満月の形に作り

火にあぶりて菓子と昔は浪荒濱乃百姓掃部

石斛



とひふ者の子小太郎といひて羽州象浮の人の
娘を妻に約しつゝいまご婚義とりのへざる前に
小太郎病まゝ死しけまばそ女は妻にまたり
剃髪しつゝ紅蓮比丘尼と称し瑞岩寺の南に
庵をむきびは果子をんとぬて賣るを紅蓮
せんをいと名づく今心月菴といふ寺有りその住
居せし跡なりとぞ果子を今も作りて賣るれ
ありは村の名おとい

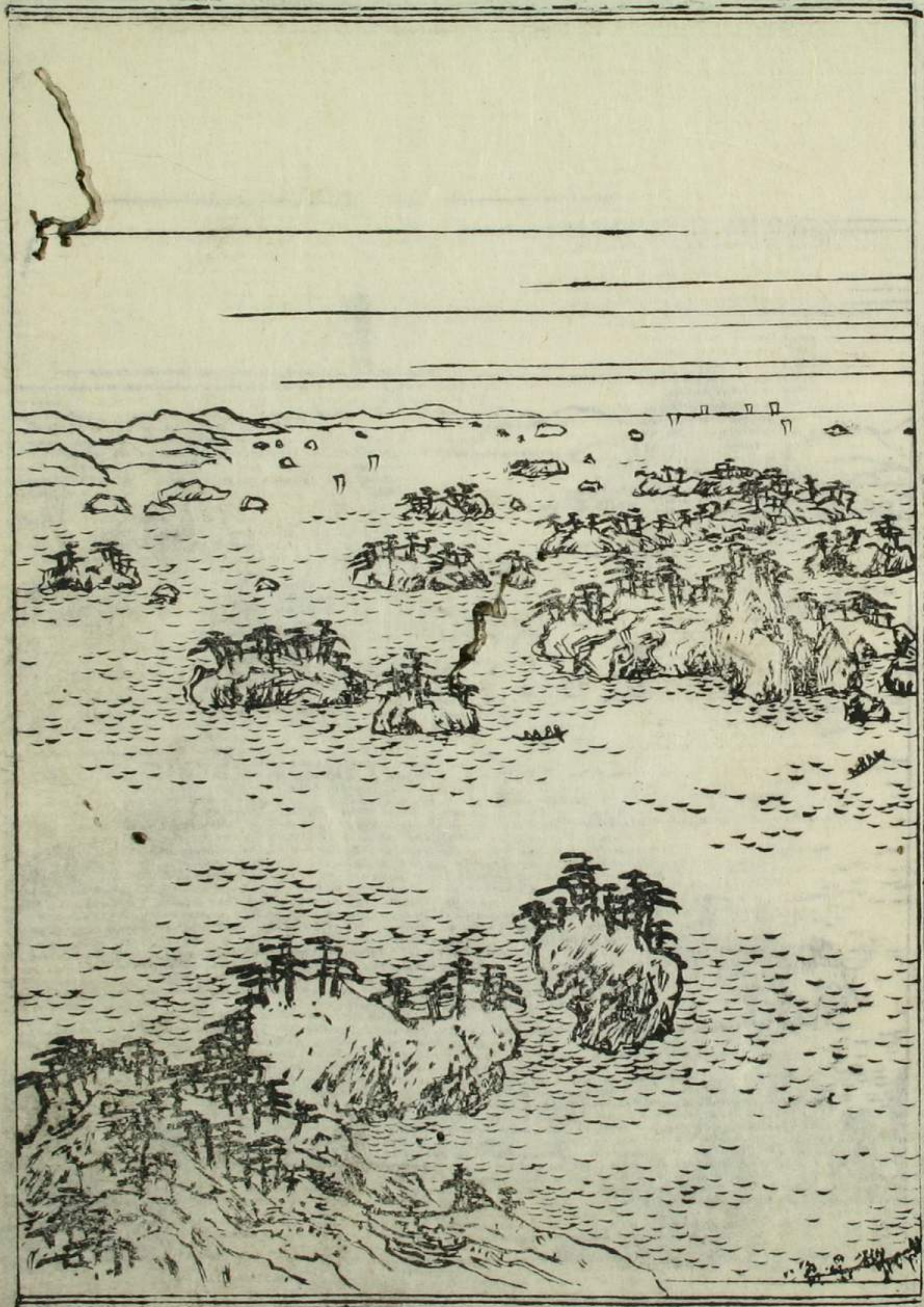
△路程 江戸より松崎まぎ丑の方九十九里 ○

仙臺城下より丑寅の間六里半 ○千賀の鹽竈

北の方戴里半海陸ともに里數同じく游客を必
舟路を通るべし奇觀多し陸路もさせば嶮
多しなり○利府驛仙臺城下よりより丑寅の方戴
里半

松室より高城驛まづ丑の方半里○同富山まで
寅の方戴里舟にのりゆき里○同金花山まで寅卯
乃間二十里海上も日千里敷なきも松室よりそぐさばにゆき
舟もなき唐那よりゆきまづのべしなきも風波
穏あつさる○同石の巻まづ八里半

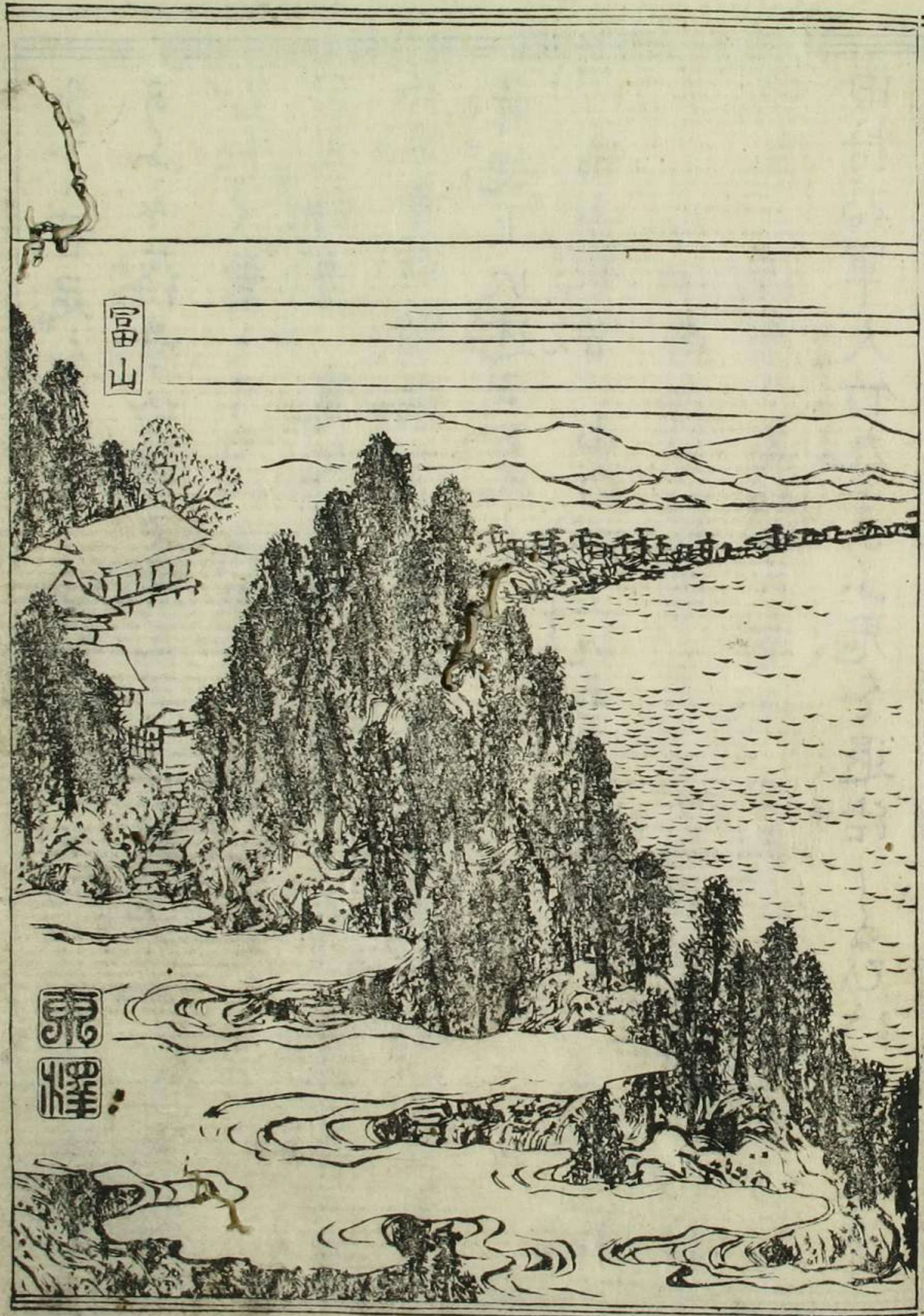
○富山 松嶋の東北手檣村の内にあり海岸に出て
高た山なり木立深くく晝ともぬのくく
半腹の大仰寺とゆふありその院中より眺を以
ては松室の海面庭上の泉ありぬく浮める鳥く
目の下にとちくく松乃録も手に摘むべしと云ふ
其風景詞のねもふべたにあつたに古より松嶋の
風景も富山のありとより余遠近の眺をハ東南
遙に大海の天と一色なるをながく遠た右ハ相
馬の諸山より近き唐那の二ツ森まづ數百里の程
あつたたに遠たも金花山ちうた々日和山にゆる



天
島
三
六



儀
出
寺



大空山三十七

まじり昔足をあげてふむべしとおもはる又漢舟のり
あふる落葉の流るうめく塩屋のけりち風いな
びたろ雲とものいためびくさはいちんうこな
○大仰寺 寛文中瑞岩寺洞水和尚開基瑞岩
の末寺臨濟宗なりはちのを上乃眺望世にまきなる
奇絶上に述るがめく

○富山観音 山の頂上にあり大同年中田村磨建
立しゆふ奥及三観音の一とゆふ 牧山 麓岳 側は田村
將軍の像あり馬にのり甲冑を帯せり俚俗の傳は
田村將軍大竹丸といふ鬼を退治しぬひは愛に骨

をうづめく堂をたてふとゆふ

右富山も手樽村の内は松岩の地にあり松
どの山上の眺を松崎を一瞬にえたるく昔より
松岩の景富山にありといひあはちるにゆりて聊
たの附記を

文政三年庚辰四月

仙臺

鼓缶子述
東澤 圖

松崎圖誌 終



近思錄摘說

十四卷

四書摘疏

大學既刻

四卷

論語章旨

二卷

西銘考

一卷

朱子感興詩考

一卷

易學啟蒙摘說

五卷

太極圖說考

一卷

家禮圖

一卷

白鹿書院揭示講義

一卷

敬齋箴國字說

一卷

大學知止節國字說

一卷

大學誠意傳國字說

二卷

論語難章講義

四卷

中庸第二十五章講義

一卷

詩識名

近刻

說六卷
圖六卷

十二卷

三綱發蒙

三卷

祭祀來格說講義

一卷

祭享說叢

一卷

以上漢文
以下國字



五行易指南

既刻

十卷

推命書

既刻

三卷

分田考

一卷

仙臺方言

二卷

經世談初編

五卷

宗法說

一卷

理氣鄙言

既刻

一卷

松嶋圖誌

既刻

一卷

○訓點書目

小學

近思錄

四書

五經

楚辭

四書

